

## 明治期日本のカトリック教会堂における様式に関する研究

—パリ外国宣教会の目指した「ゴシック」「ロマネスク」様式の天主堂—

檜皮 拓也※1

### 概要

明治初期にパリ外国宣教会によって建設された教会堂は、その多くが、フランス人宣教師が設計し日本人大工が施工した建物であり、「ゴシック」や「ロマネスク」といったフランス本国の教会堂を模したと思われるデザインを持っている。既往研究では、その設計に関することはいまだ解明されていないことが多い。本研究では、建築の専門家ではなかった宣教師たちがどのように建築様式というものを理解し、日本という遠隔の宣教地の教会堂でそれを実現しようとしたかを明らかにする。パリ外国宣教会に残る宣教師の書簡の調査や日本で教会堂建設に携わった大工の研究、教会堂の比較研究を手掛かりに、日仏双方の視点から日本の教会堂建築を捉えなおすものである。

### 研究背景と目的

明治初期にそれまで続いていた禁教令が撤廃されると、パリ外国宣教会による日本布教が活発化し、各地に教会堂が建設されるようになった。それらの多くは、フランス人宣教師が設計し日本人大工が施工した建物であり、「ゴシック」や「ロマネスク」といったフランス本国の教会堂を模したと思われるデザインを持っている。宣教師の多くが建築の専門家ではなかった中で設計された教会堂は、いわゆる擬洋風建築ともまた異なる独特の形態を示している。近年では、現存教会堂が最も多い長崎地域を中心として研究対象として取り上げられてきているが、その設計に関しては不明な点も多く残されている。

ここで明らかにしたいことは、建築の専門家ではなかった宣教師たちがどのように建築様式というものを理解し、遠隔地の教会堂でそれを実現しようとしたか、ということである。宣教師による設計の実態に関しては明らかでない点も多く、図面などの

資料もいまだに発見された例がない。一方で、パリ外国宣教会本部には宣教師らの書簡など膨大なアーカイブが未着手で残っているとされる。本研究では、これらのアーカイブの検索をはじめとして宣教会の意思やフランス本国での建築的流行などを調査し、日仏双方の視点から日本の教会堂建築を捉えようとするものである。これは、日本における西洋建築の受容の一つのあり方としても重要な視点であると考えられる。

### 研究成果と考察

まず、書簡などの資料を用いながら、宣教師による設計活動とはどのようなものであったのかを検討した。

宣教師オズーフ (Pierre Marie Osouf, 1829-1906) が築地天主堂を建設した際の様子を記した文書には次のようにある。

「オズーフ司教が赴任地に着いて間もなく、最初の事業の一つとして教会堂の建設に着手した。これが後に彼の大聖堂

※1 京都工芸繊維大学 修士課程

## 【様式 2】

となる。彼は築地地区を選んだ。当時はヨーロッパ人租界であった（中略）プティジャン司教は、極めて純粋なゴシック様式で完璧な比例（d' un style gothique très pur et d' une justesse de proportions irréprochable）を備えた新たな聖堂を厳かに祝福した。実際、これはベタニー療養所の見事な礼拝堂を大きく再現（reproduction）したものであった（中略）。一方は現地語を全く理解しない司教、もう一方はゴシック教会を見たこともなく、何をすべきか見当もつかない日本人大工。しかし身振り（gestes）や紙に描いた小さなスケッチや地面に描いた実寸大のスケッチ（croquis）によって、彼らは常に意思疎通を図り、教会の祝福の日には、宣教師も信徒も皆が喜びに包まれる中、最も幸せそうだったのは大工であった。」

ここでは、この教会堂が具体的な先行建築の設計に基づいていたことを示している。また後半では、オズーフが日本人大工に対してどのように施工を指示していたのかが具体的に記されている。ここで言及される croquis とは、フランス語で素早い素描や略図、見取図を意味する語であり、簡易な指示図であったと考えられる。この記述からは、オズーフが施工段階にも積極的に関与し、大工に設計意図を伝達していたことがうかがえる。

一方、パピノ（Jacques-Edmond-Joseph PAPINOT, 1860-1942）が設計した京都天主堂に関しては、1889年（明治21年）4月15日付の書簡において、次のように記されている。

「パピノ神父は京都の教会の設計図を描いて（faire les plans）います。美しいゴシック様式で、翼廊はありませんが、

壮大でよくできた教会になるでしょう。それが日本のローマに必要なものです。」

ここで用いられている faire les plans という表現から、パピノが実際に建築図面を作成していたことが明確に読み取れる。前述した croquis のような簡易な指示図とは異なる、より体系的な設計図が作成されていた可能性が高い。

宣教師エルヴェ（HERVÉ François, 1874-1973）は手紙で、自身が一部関与していた鶴岡天主堂の建設を回想して次のように記している。

「聖堂の設計は既に出来ていました。決してこの設計は写真を基にしたフランスの聖堂の模写ではありません。実は、この聖堂の設計図を書いた方は、当時の神田教会の主任司祭をしておられたパピノ神父様です。パピノ神父様はとても優れた方で、音楽家であり、しかもオルガニストでもあり、また、建築の学校の卒業証書を持っておられました。彼は日本の多くの聖堂の設計図を書きました。パピノ神父様にとって鶴岡教会のような小さな聖堂の設計図を書くのは朝飯前の仕事ですが、聖堂のスタイルは見事なものでした。

さて、この設計図を生かすのは容易な仕事ではありませんでした。業者が大変な正直者でしたし、また、きれいな仕事に仕上げたいという気持ちで一杯でした。しかし、如何にベテランの大工さんでも、見たこともないロマン式建築の実現にはセンスもなければ経験もありませんでした。それでマトン神父様は、パピノ神父様の説明を聞かせるために、また、神父様の指導で東京に建てられた教会を研究させるために彼を東京に送ったのです。大工さんは十分に研究を重ねた上で鶴

## 【様式 2】

岡に帰ると、早速工事に着手したのです。この工事は一年余りもかかりましたが、材料は申し分ない物でしたし、仕事も非常に丁寧にしてくれました。」

この手紙は、鶴岡天主堂が写真を用いた模写によるものではなく、パピノによって設計されたこと、ならびにその設計が日本人大工によって実現されるまでの過程を伝えている。

また、前述の京都天主堂の設計過程について、当時京都教区を管轄していたヴィリオン (Aimé Villion, 1843-1932) は自身の手記の中で、「ヨーロッパから届いた図面は、土地の事情により、少し変更しなければならなかった。それは東京に居りました親愛なるパピノ神父の精妙な仕事でした。尊敬すべき大司教オズーフ猊下の深甚なるご配慮により、パピノ神父は京都に暫時滞在して全ての図面を作り直し、その情報を日本の請負師ペトロ横田に与えました」と状況を記している。現存する図面資料が確認されていないため、詳細な設計内容を明らかにすることは困難であるが、「ヨーロッパから送られてきた」という表現から、パリ外国宣教会本部から図面が送付された可能性も想定される。さらに、確保された敷地の規模や、日本人大工が施工する事情などを考慮し、設計変更が行われたものと推測される。

同様の事例は、函館元町教会堂においても確認できる。同教会堂では、横浜の本部から送付された設計図を、実際の敷地条件に合わせて調整する必要があったとされている。マラン (Jean-Marie Marin, 1842-1921) は 1876 年 6 月 22 日付の書簡において、「その場所を知らなかったミドン神父は、これらの状況に完全には合致しない計画を立てさせた」と記し、設計

の不適合を批判している。この記述から、設計が当時横浜にいた宣教師のもとで行われていたことが読み取れる。また、1876 年 2 月 1 日付の書簡においても「その良い計画のために、私は貴重な時間を失い、教会も手に入れられなかった。すでに 6 万フラン以上が費やされているが、共用部分はまだ完成していない。しかし、4,500 人を収容する教会は函館にとって無意味である。」と同様の批判が見られることから、函館元町教会堂の設計段階において、敷地条件や実際の需要に対する認識が不十分であったことが、当時すでに問題視されていたことがわかる。

結果的に完成した函館元町教会堂は、特異なギリシャ十字形の平面構成を有する建築となったが、先行研究においては、当初のオーバースケールな計画に対し、現場の判断によって身廊部分を縮減するなどの変更が加えられた結果である可能性が指摘されている。この事例は、パリ外国宣教会における教会堂設計が、必ずしも一貫した計画のもとに遂行されたのではなく、設計者の構想と現地の判断との間で調整や修正を重ねながら進められていた実態を示すものである。

次に、宣教師らの様式認識について検討した。1836 年に書かれた教会堂建設に関するマニュアルである『美術品、特に古今の宗教建築、教会堂の建築と改修に関する、教会に役立つ知識マニュアル：リトグラフによる図面と絵を添えて』には建築様式に関する記述があり、時代様式ごとにその特徴をまとめ通史的に説明されている。ここでゴシック建築は「オージヴァル(ogival)」様式と記述されており、ギリシア建築を引き合いに出し、「ギリシャ様式の教会には、それらを少し区別するいくつかの外見的特徴がある。しかし、こうした特徴が小さくなるにつれ

## 【様式 2】

て、あるいはあえてそれを作らなくなるにつれて、これらの教会と世俗的な建物との違いも小さくなってゆく。消えつつある。ギリシャ神殿が造られるが、ギリシャには十字架も回廊もなかったように、私たちはもはやキリスト教の特徴的な印をどこにおいて良いのか分からない。」と述べ、ギリシア建築を教会堂建築に適用することへの批判的な立場を明確にしている。そのうえで、ゴシック建築について「カトリックにふさわしい、ある種の宗教的要素である」と記し、ゴシック建築が教会堂に相応しい様式であることを強調している。さらに同書では「教会内のすべてが魂の動きと関係し、すべてが信仰を守り直し、そこで崇拜する主の偉大さと力を思い起こさせることに貢献しなければならない。これはゴシック建築が生み出す効果である。その高さと広大な規模が印象的で、瞑想にふさわしい神秘的な暗がりを生み出す」と述べ、高さによって神秘性を生み出す点において、ゴシック建築を高く評価している。

このように『マニュアル』においては、古典建築は宗教的な象徴性に乏しいものとして評価されなかったのに対し、ゴシック建築はカトリック教会堂にふさわしい精神性を表す様式として重視されており、当時の聖職者教育における建築様式の考え方をよく示している。

また、ノルマンディー考古学協会長のコシェ (Cochet) 修道院長は、「私はオジーヴを最も優れた宗教様式と見做している。古典派の世紀において、建築は冷たく、抑制され、秩序だったものになる。異教の天才は我々の土地に根付き、宗教改革に押されて、我々の行く手にあるものを全てを枯渇させる。」と宗教建築においてはゴシック建築が本質的にふさわしいと考え、古典主義や宗教改革によって宗

教建築が本来持っていた精神性が失われたと批判的に評した。

実際に、こうした様式に関する認識が、日本における教会堂建築の計画に影響を与えたと考えられる事例が存在する。1862 (文久 2) 年に建設された横浜天主堂のファサードはイオニア式オーダーの柱にペディメントを載せた古典主義モチーフのデザインとなっているが、このような外観は、建設当時、なお鎖国体制下にあった日本において、たとえ外国人居留地内であっても、尊王攘夷思想を掲げる人々による襲撃の対象となることを避けるため、外見上は教会堂と認識されにくい意匠が意図的に選択された結果であるとされている。この事例は、パリ外国宣教会本部および日本に派遣された宣教師たちが、前述の『マニュアル』に書かれていたような様式への認識を持っていたことや、それらを意識的に選択・操作して用いていたことを示すものである。

また、日本に教会堂を建設する場合には、ゴシック様式を採用した方が日本の伝統的建築様式による建設よりも経済的であると考えられていた。

「宣教師たちが日本の様式で教会を建てられない理由の一つがこれです。あまりにも多くの費用がかかるか、そうでなければ適当なものがないからです。一方、オズーフ神父が建設中のゴシック様式の石造りの教会は、日本人にとって究極の壮麗さです。彼らはそれがコスト削減策であるとは思いません。地震さえおさまってくれば！」

ここでは、日本の伝統的な宗教建築が、多大な費用と労力を必要とすることを指摘している。そのため、日本の建築様式を採用することは費用面から現実的では

## 【様式 2】

なく、ゴシック様式の方が壮麗である一方で経済的であると認識されていたことがうかがえる。リブヴォールト天井などに多額の費用がかかる教会堂建築であるが、それでも寺院建築などの日本建築に比べて建設費を低く抑えることができたとみられ、様式選択の一因となったと考えられる。

また、**先行研究では**、中国におけるゴシック様式の教会堂について、ルルドの教会堂に触発されたものであると指摘している。ルルド信仰は当時のパリ外国宣教会によるアジア宣教で利用され、日本をはじめとしてアジア各国でルルドの洞窟を模したものが建てられるなど非常に大きな影響をもたらした。ルルドの無原罪懐胎大聖堂は1871年に竣工した教会堂である。教会堂の姿は、同時期に急速な発展を遂げた写真技術を通じて、ルルド信仰の拡大とともにアジア各地へと伝播していたと考えられる。そのため、ルルドの教会堂が宣教地における教会堂建築のイメージ形成に影響を与えていたとしても不思議ではない。特に前述のパピノは複数の教会堂で尖塔屋根を持つ独立した鐘塔を正面中央に据える単塔式の教会堂を設計しており、これらの教会堂はルルドの無原罪懐胎大聖堂に非常によく似た意匠と構成を持っている。

ルルド大聖堂を設計したイポリット・デュラン (Hippolyte Durand, 1801-1882) は、19世紀フランスにおけるゴシック・リヴァイヴァルを代表する建築家の一人であり、フランス南部を中心に多数の教会堂建設を手がけたことで知られている。エコール・デ・ボザール卒業後、中世建築を専門とし、ランス大聖堂の修復工事に携わったほか、複数の中世建築の修復に関与している。デュランはまた、中世様式の教会堂の標準的な設計図の作成に取り組み、自治体の規模に応じていくつかの標準となるタイプの教

会堂を設計した。彼はこれらを1845年のサロンで発表し、プランごとの見積書と設計図を『地方における芸術と考古学 (L'Art et l'Archéologie en province)』に「宗教芸術に関するいくつかの考察 (Quelques considérations sur l'art religieux)」というタイトルで掲載した。彼は宗教建築において古典主義よりもゴシックやロマネスクといった中世建築が本質的に適しているという認識を持ち、各地での教会堂建設や標準的な設計図の作成を通して、その考えを具体的な形として示した人物であった。

本論では、日本における教会堂建築は単なる西洋の建築様式の表層的な模倣ではなく、宗教的思想に基づく明確な様式観を持っていることを示した。また、それはフランス本国の教会堂建築におけるゴシック・リヴァイヴァルやロマネスク・リヴァイヴァルの動きに対応するものであり、日本の教会堂建築をより世界的な宗教建築の潮流の中に位置付けられる可能性がある。この点において日本の教会堂建築は他の明治期西洋建築とは性格を異にするものであり、日本の近代建築史の中でも特筆すべきものであると考えられる。

## 参考文献

AMEP, *L'ART DANS LES MONUMENTS RELIGIEUX PAIENSET CE QUE L'ART EN MISSION A PU LUI EMPRUNTER*, 1930.

Anonyme, *Après le cataclysme du Japon : In memoriam*, 1923.

*L'Art et l'Archéologie en province*, 1849, t. IX.

荻原泉『天主堂を仰ぎ見て：重要文化財・鶴岡カトリック教会』、鶴岡カトリック教会、1996年。

函館カトリック元町教会調査研究委員会編『函館カトリック元町教会調査報告書』カトリック元町教会、2024年。